

小さな村の大きな取り組み

—— 八ヶ岳高原ことばの学校 ——

別府短期大学部 経営情報文化科

松田美香



「ことばの学校」会場

I 「ことばの学校」とは

「ことばの学校」とは、誰が名づけたのだろう。「学校」からは何かを教えてくれる、いや訓練を受ける所というイメージが付きまとう。ことばの学校というからには、一種の言語訓練を受けられる場所なのだろうか。このイベントに参加することにした理由は、まず第一に「ことばの学校」と



1) 氏は、後述する金田一春彦ことばの資料館設立の立役者でもある。また現在、早稲田大学と都留文科大学にて図書館経営学他の非常勤講師も兼務されている。

いうイベント名の不思議さからである。そして、もう一つの大きな理由は、「学びットやまなし」代表であり八ヶ岳大泉図書館の初代館長も務められた小林是銅氏が招待してくださったからである。氏は、山梨方言研究の第一人者でもある。この懐深い小林先生が、今何に取り組んでいるのか、その現場をぜひ見たいという思いも強くあり、晩秋の山梨へ出かけた。

II 第1部 開会～方言川柳授賞式

今年は第2回目開催の内容を報告する。まず、「ことばの学校」の主催者等と全行程を以下に記す。

主催：第2回八ヶ岳高原ことばの学校実行委員会

後援：山梨県北巨摩郡 高根町・長坂町・大泉村・小淵沢町※事務局は八ヶ岳大泉図書館

11月23日（第1日目）

10:00am／オープニング・校長あいさつ

◎校長挨拶／国語学者 金田一春彦

10:30am／講演「わたしと日本語」

作家 下重暁子（元NHKアナウンサー）

13:30pm／ミュージカル「ピアニャン」劇団やまなみ

15:00pm／「方言川柳」表彰式～あたたかなお国ことば（方言）で綴る五七五～

18:00pm／分校セミナー

20:30pm／修了式

11月24日（第2日目）

10:00am／ウォーキング「方言で訪ねる三社まわり」（高根町檜山地域6キロを地元の方の案内で巡る）

「ことばの学校」の「学校」で不思議に思っていたのに、夕刻からは「分校」とは驚いた。しか

も、分校は4箇所あって、同時間開催だから1人1校しか参加できない。以下にそれぞれの分校名と内容概略を記す。

1. 高根分校（北甲斐亭）／「ことばの中の真実」演目：樋口一葉「十三夜」・太宰治「御伽草紙」より／カチカチ山（甲州弁）・風の又三郎とサイクルホール他
2. 長坂分校（法性寺）／「坂本和子語りの世界」朗読とチェロの演奏とお話
演目：宮沢賢治「なめとこ山の熊」
3. 大泉分校（金田一春彦ことばの資料館）／「セリフの中のことば」朗読と紙芝居演目：金田一春彦「ケヤキ横町の住人」・江國香織「草之丞の話」・向田邦子「かわうそ」・紙芝居「泣いた赤鬼」
4. 小淵沢分校（㈱アルソア本社・スペース森羅）／「ことばのルーツを探る『音の不思議』」古事記・五行歌を題材としたお話

筆者の時間の都合で、実際にはミュージカルの途中から分校の終わりまでしか参加できなかった。ミュージカルの後、「方言川柳」の受賞式が行われた。この式には、遠隔地やどうしても都合のつかない方以外の受賞者は出席していたようだ。式の前に、参加者全員へ小冊子『第2回八ヶ岳高原ことばの学校 方言川柳入賞作品集』が配布された。金田一春彦賞を始め、芳賀綏賞、また高根町長賞など4箇町村長賞、さらに各教育長賞など17句と入賞93句が収められた30頁の立派な冊子である。式が始まると金田一賞から順に受賞者に記念の盾等が授与され、それぞれに自作川柳を読みあげる。司会の小林氏から、作品のエピソードなどを聞かれると、受賞者は照れながらも嬉しそうに答えていた。もちろん、皆盛んな拍手を受けていた。ちなみに金田一春彦賞受賞句は、「泉辺に ほうさほうずら 風の詩」（ほうさほうずら：そうです、そうでしょう）山梨県の金原みよ子氏であった。受賞作は山梨県にとどまらず、芳賀綏賞「べごのすた きれんこぬ 咲いでえら泉端」（べごのすた：水芭蕉、きれんこぬ：綺麗に）岩手県の折館一男氏、長坂町議会議長賞「んかしすい なまやいずみざき まちゃーむや」（都会は変わった、昔は首里だったのに今は、泉崎）沖縄県の譜久村恭旦氏など、日本中からとい

っていい。一般的に方言で詠んだ詩歌は、ある特定の地域の人にしか通じないという指摘があるが、今回は川柳と割り切った効果か、不自由な感じはなかった。むしろ、知らない方言であっても現代共通語訳を併せて読めば、その土地の風景をより味わっているような気がしてくる。考えてみれば、方言も川柳も「軽くて深い」味わいを持つという共通点が見出させる。川柳には高級感がさほど無い反面、生活実感が強いわけだが、それは方言にも言えることなのである。高級感がないと大事にされない風潮がこれまであったが、高級感と一般性を求めすぎた結果、現在の空疎な文化状況があるのではないか。その欠落を埋めるためにこれまでも実にさまざまな試みがされてきたわけだが、筆者の経験から言えば、行政主催のお仕着せの催しであるとか、文化保存を高らかに謳いすぎたものは実はおもしろくないとか、欠点が目に付くことが多かった。その点この企画は今回が初めてだそうだが、他の土地でもできる非常によい試みだと思う。

私たちの記憶に残る、いくつかの他の土地のことばは、そのことばから発せられる匂いだったり、あるいは色だったり、風景だったりなことばから離れず、いつまでも強烈な魅力を放っている。方言と川柳の組み合わせは、非常に優れた仕掛けであると思う。ますますの発展を期待する。

Ⅲ 第2部 分校「せりふの中のことば」

筆者は、前章で記した大泉分校を選び、俳優座の女優岩崎加根子氏の朗読と座談、紙芝居を鑑賞した。撮影を申し込んだが、係から許可されなかったので、写真で紹介することはできないが、広い書齋を思わせる金田一春彦ことばの資料館（後述）が分校会場だった。資料館の正面突き当たりに洋室のシンボルのような深紅の電気スタンドが立てられ、その傍にはゆったりとしたソファやテーブルがあり、さりげなく花が飾ってある。明かりは落とされ、静かに椅子に座り朗読する岩崎氏だけにスポットライトが当てられた。このような演出により、参加者は朗読の世界に容易に入ることができたように思う。金田一氏のエッセイや人気女流作家の江國香織作「草之丞の話」、向田邦子の短編、そして紙芝居「泣いた赤鬼」の朗読を

聴いた。特に向田邦子の「かわうそ」は、妻の明るさの奥にあるしたたかさ、さらには残酷さを感じさせるもので素晴らしかった。朗読の最中、会場は物音ひとつ無く、一方、司会者や岩崎氏のファンを交えてのトークはなかなか面白かった。

しかし、「分校」として期待した部分、筆者はいわゆるワークショップ²⁾のようなものを予想していたが、実際は岩崎氏の朗読を聴き、また仕事上の苦労談などを聴くという観劇・鑑賞の形式にとどまった。同行の中川美和氏（東京都立大学）は高根分校に参加し、後で様子を聞いたがやはり同様に読み手と聴衆の関係しかなかったようである。分校の在り方は今後も改善の余地がありそうだ。

IV 金田一春彦ことばの資料館³⁾



24日はウォーキングに参加せず、「金田一春彦ことばの資料館」を利用することにした。大泉村は、国語学・方言学の大家金田一春彦博士が別荘を建て、エッセイを書くほど気に入った土地である。そこで、現在の大泉図書館建設の際に、先述の小林是鋼元館長が金田一氏に蔵書を寄贈してくれないかと申し入れて実現したのが、この資料館である。村の人に聞いたところ、金田一博士は時折図書館に来て、ご自身の蔵書を見たりしているそうである。実際に利用してみたところ、国語学を中心に音楽や外国語の分野まで四方の壁の書棚にいっぱいの本、さらに下段の引き出しには貴重な研究会の雑誌のバックナンバーが揃っている。肖像画や勲章や賞状が飾られてとても贅沢なスペースだった。また、入り口ドアの近くには「日本の方言コーナー」（写真）もあり、コンピュータを操作して、日本の方言や甲州弁を体験することもできる。筆者は5～6時間をそこで過ごしたが、金田一氏の書き込みのある研究会冊子などを見ることができ、飽きることがなかった。

しかし、優雅な時間が過ごせたということも、他に来館者がいなかったということでもある。「ことばの学校」は、この資料館を利用する人を増やすためのもくろみでもあるはずだ。プログラムの中にうまく入れて欲しいと思った。

V 小さな町々の大きな取り組みを支えるもの

「ことばの学校」を支えるスタッフはボランティアの方々である。図書館をはじめとする行政がバックアップしているが、講師の手配から参加者の送迎まで限りなく細かい仕事があり、それらは無償の有志が中心になって行っている。第1部の後、小林氏のご厚意で夕食をご一緒しながらお話する機会を得た。まず、小林氏は無理に人を集めない、次第に適正な人数が集うような形を目指していると語られた。少しでも多くの国語学の研究者が、大泉村で小さなゼミナールをしたいと思い、実現することがこの取り組みの理想図なのだそう。話を聞きながら、実行委員会の原動力は何かを考えた。「村おこし」と言えばそれで済むのかもしれないが、村内にこだわらず近隣の町村を巻き込んで展開していく方向性が見える。小林氏は他にもいくつかのプランを聞かせてくださったのだが、どれも図書館やそこで働く者の現状の限界を破るためのアイデアに溢れたものだった。文化を守り、広め、伝えていく方法としてのことばや図書館、そしてそこで働く人、これらをより良くするためには、いろいろな問題を解決していかなければならない。小林氏はそういう制約からの飛翔を目指し、ひとつひとつの問題と対決しているのだ。

「夢」ということばが浮かぶ。現状を見据えた結果、私たちの中に芽生える「こうであったら」という夢。その夢を実現する一本の道を小林氏が示し、共鳴する者が集まって「八ヶ岳高原ことばの学校」が出来上がっているのではないかと。日本語を見直し、そして後世に満足いくように伝えたいという「夢」があるから、「ことばの学校」は誕生し、第2回を終えたのだと思う。「八ヶ岳ことばの学校」第2回に参加して、ひるまず進む実行員の方々に羨望と尊敬の念を抱いた。

2) Workshop：所定の課題について研修や討議をする会

3) 八ヶ岳大泉図書館のホームページ内

<http://www.vill.oizumi.yamanashi.jp/>